# バカとボケと召喚獣

神爪 勇人

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺達はバカだ。だが、俺達は最強だ‼

# 目次

第1章　試召戦争編
第1問　史上最強の馬鹿の始まり　1
第2問　Fクラス　8
第3話　クラスメイト　13
第4話　2年Fクラスの日常風景　18

# 第1章　試召戦争編

## 第1問　史上最強の馬鹿の始まり

バカテスト　化学

問　以下の問に答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を1つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為、危険であるという点』

『合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

「正解です。合金なので〝鉄〟では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っ掛かりませんでしたね」

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

「そこは問題じゃありません」

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

「すごく強いと言われても」

坂本雄二の答え

『合金の例・・・鉄人』

教師のコメント

「一瞬〝鉄〟と見間違えましたが、西村先生で鍋は製作出来ませんし、合金でもありません」

上田祐一の解答

『問題点・・・鍋を作ろうとしたこと』
教師のコメント
「そこはつっこまないでください」

◆◆◆

『文月学園』
新設校にして、現在世間で最も話題を呼ぶ新技術〝試験召喚システム〟の試験採用校。
学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られるこの学園。
それ故に、多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い。
そんな文月学園に俺が入学してから、1年が経過した。
あっという間だなぁ・・・と、俺は入学の頃を思い出す。
そう、あの時もこうやって、
「上田」
こんな感じにドスの効いた声を掛けられたんだっけな。

「よ、鉄じｎ――――ゴリｒ――――西村ティーチャー」
「お前、今なんて言おうとした？」
「別に鉄人とかゴリラなんて言ってませんよ？」
――――ゴスッ!!!!
「先生、頭が凹みます」
「大丈夫だ、お前は頑丈だからな」
頑丈だったら生徒の頭を殴っていいとでも!?
まったく、相変わらず脳筋な奴だ、このクソゴリラが。
――――ゴスッ!!!!!!
「先生、マジ痛いっす」
「我慢しろ」
「何でだ!?」
「お前が何か良からぬことを考えたからだ」
何で知ってる!?
野生の勘かよ、マジでゴリラなんじゃねぇかコイツ。
――――ゴスッ!!!!!!!!
「おい！　バカスカ殴ってんじゃねぇよ!!　馬鹿になったらどうしてくれる!?」

「そんな心配はしなくてもいい」
「あぁん!?」
西村先生こと鉄人ことクソゴリラが、俺に無言で封筒を手渡す。
ああ、コレに今年の所属クラスが書かれてるんだっけか。
「上田。お前、入学式の事を覚えているか？」
封筒を開けて中身を確認しようとする俺に、鉄人が語り掛けて来た。
「そりゃあ、まぁ、覚えてっけど」
「俺はな、色んな生徒を見て来たが、お前達のような奴は初めてだった」
「そうか？」
「ああ。まさか高校の入学式で――――――」
俺は入学式の頃を思い出す。
「――――パンツ一丁で式に出る生徒なんて初めて見た」
そうだ、俺はボクサーパンツ一丁で入学式に出てたんだ。
それだけ聞くとただの変態だが、勿論俺はそんな変態じゃない。
アレには深い訳があるのだ。
「先生、知らないかも知れませんが、アレには深い訳が――――――」
「知らないはずが無いだろう。あの時、お前と吉井を見つけたのは俺なんだぞ？」

そうか、知っているよな。
なら、何も問題は無いハズだ。
「高等学校の門前で夜通し酒盛りし、パンツ一丁で寝ていたのを見つけた時は自分の目を疑ったぞ」
・・・・・・何も問題なんて無いよね？
「明久にも言いましたが、それは誤解なんです」
「ほう？　そうだったのか」
「ええ」
「では、何故あんな事になっていたんだ？」
「学校前で酒盛りすれば、寝過ごしても遅刻しないだろうと」
「そもそも未成年が酒を飲むなぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!!!」
ゴスッ!!!!と、再び鉄拳が俺の脳天に!!
殴られた拍子に、封筒の中身から一枚の紙きれが落ちた。
そこにはこう書かれていた。
「まったく、やはりあの時感じた俺の評価は間違っていなかったようだな」
『上田祐一・・・・・・Ｆクラス』
「お前はバカだ」

# 第２問　Ｆクラス

バカテスト

国語

問　以下の意味を持つ諺を答えなさい。

『（１）得意な事でも失敗してしまう事』

『（２）悪い事があった上に更に悪い事が起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『（１）弘法も筆の誤り』

『（２）泣きっ面に蜂』

教師のコメント

「正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね」

土屋康太の答え

『（1）弘法の川流れ』
教師のコメント
「シュールな光景ですね」

吉井明久の答え
『（2）泣きっ面蹴ったり』
教師のコメント
「君は鬼ですか」

上田祐一の答え
『（1）河童も筆から落ちる』
『（2）弱り面蹴ったり』
教師のコメント
「混ざってますよ」

◆◆◆

この学校は成績順にＡ～Ｆクラスに所属し、成績順に教室の設備のランクが下がっていくのだ。
Ａクラスの教室は超豪華だ。
高級ホテルでも此処までの充実してないんじゃないだろうか？
次のＢクラスは良いとこの大学のような教室だ。
Ｃクラスは金がかかってる高校の教室っぽい。
Ｄクラスはいたって平均的な教室で、ここが成績の平均値といわんばかり。
Ｅクラスは、ボロい田舎の学校の様な教室だ。
殆ど木製だしな。
そして俺が所属するＦクラスはというと。
「時代が違う」
まるで明治時代辺りの村塾の様なイメージがあるぞ。
畳みにちゃぶ台に座布団。
しかもどれも腐ってたり、傷んでたりしている。
腐ってたり傷んだりしてるものを使う必要は無かったんじゃないだろうか。
ランクは最底辺でも普通のでいいじゃん。
「まだ誰もいないか」

確かに結構早い時間帯だが、まだ誰も学校に来ていない時間帯という訳では無い。
朝練をしている運動部の掛け声が聞こえてくるしな。
流石は最底辺クラス。
早く学校に来るなんて殊勝な奴はあまりいないらしい。
「席は適当でいいのか？」
普通なら出席番号順とかなんだろうが、誰が何処のクラスなのかは其々に配られる封筒を開けなければ分からない。
つまり、誰が何処のクラスになるのか、教職員しか知らないのだ。
ま、明久はこのクラスで間違いないと思うが。
出席番号順で教師が教室にいないのなら、誰が何処に座るのかなんて分からない。
ちゃぶ台に名前がある訳でもなさそうだし、適当でいいのだろう。
取りあえず、一番後ろの窓際を陣取ろう。
学園物の主人公ポジションだ。
「何で窓割れてんだよ」
ホント、設備環境酷すぎだろ。
今日はそんな手持ちねぇからな、明日色々持ってくるか。
「うーむ、暇だな」

まだ授業開始まで時間がある。
取りあえず一服するか。
俺は鞄から水筒を取り出し、コップに水筒から茶色い液体を注ぐ。
「ま・・・まずは新学年に乾杯ってな」
グイッと、俺は窓から見える桜の花弁を肴に茶を飲んだ。
・

# 第3話　クラスメイト

「――おぃ――――ち――――おい、祐一、起きぬか」
「ふが？」
如何やら机に突っ伏して寝ていたらしい。
グッと伸びをして起きる。
そして俺を起こそうと声をかけてくれた主に顔を向け、
「美少女がいる」
「ワシは男じゃぞ、まだ寝ぼけておるのか」
違った秀吉だった。
男のくせに相変わらず美少女な奴だ。
周りを見ると、結構な数の生徒が集まっていた。
かなり寝てたようだな。
「随分早く来ておったようじゃな。ワシもかなり早く来たはずなんじゃが、既にお主が居って驚いたぞ」
「今までずっと運動部を梯子してたからな、朝早く起きるのはクセになってんだよ」

「今年も何処かの部に顔を出すのかの？」
「あー・・・どうだろうな。ま、練習相手くらいは頼まれればやるつもりだが」
この学校の奴らじゃ、どの部でも相手にならないのは去年分かっちまったしな。
あんま自主的に参加する意欲が無い。
「暇なら、演劇部の練習に付き合ってくれんかの？」
「おう、いいぜ」
どうせ暇だしな。
「ういーっす」
「おう、雄二」
ガラの悪い奴が寄ってきた。
「お前も同じクラスか」
「まぁな」
雄二は俺の机を見て「お？」と、乗せている水筒に気が付いた。
「茶貰っていいか、走って来たから喉乾いてよ」
「いいけどよ、別に遅刻するような時間帯でもねぇのに何で走って来たんだ？」
「何でも良いだろ」
どうせ霧島だろ。

雄二は俺の水筒でお茶を入れ、コップ部分に入れたお茶をグビッと飲み干し――――

「――――ブッフゥッ!?」

吐き出した。

「おいおい、何やってんだよ――――」

「雄二よ、汚いぞ」

「――――溢しやがって、勿体ないだろ」

「そっちなのか・・・・・・」

折角やったのに吐きやがって。

雄二はゴホゴホと咽ながら、水筒を俺に突きつける。

「おま、何だコレ!?」

「何って、どう見ても水筒だろ。ボケたか?」

「中身の話だッ‼」

「・・・・・麦茶しか入っていない筈だが?」

「げほっ・・・ホントに麦茶か? なんか変な味がしたぞ」

「変な味?」

んな事ねぇハズだが。

俺は雄二から水筒を受け取り、コップに注ぐ。
「・・・・・・祐一よ、お主麦茶と言ったが、コレは本当に麦茶なのかのう？」
「麦茶だが？」
「しかし、麦茶の割りには妙に黄色くて白い泡が立っておるのじゃが・・・・・・・」
「うん。だから（泡）麦茶だ」
「「ビールじゃねぇ（ではない）かッ‼」」
雄二と秀吉のツッコミがシンクロした。
「ビールなんて麦茶も同然だろ」
「水筒に酒なんて淹れんなよ⁉」
「相変わらず酒好きじゃのう・・・・・・」
えー、何でこんなに不評なんだ。
キンキンに冷やして水筒内でそのままの温度で保温してるから、冷たいままの筈なのに。
「解せぬ」
「解せぬはお主の価値観じゃな」
「あー、クッソ。口直しに何か飲んでくるわ」
如何にも２人の口には合わなかったようだ。

「じゃあ今度は清酒にするか」

「「そもそも酒を持って（くるでない）くるな！」」

・

# 第４話　２年Ｆクラスの日常風景

２年Ｆ組と書かれたプレートのある教室の前で、僕は少しだけ躊躇していた。
遅刻なんてしてきて、皆に悪い印象を持たれたりしないだろうか。
嫌な奴や恐い奴や痛い奴はいないだろうか。
今後一年間を共に過ごす仲間がどういった人たちなのか、不安でたまらない。
「なんて、考え過ぎかな」
たかが遅刻程度で僕は何をネガティブな事を考えているんだか。
そうだよね、相手は皆クラスの仲間。
何も心配する必要なんかないさ！
寧ろ何で遅刻したのか、僕の体調を心配してくれるはず！
良し、大丈夫。
何も心配はいらない。
信じよう、コレから共に過ごす仲間達を。
そう思って、僕は勢いよくドアを開けた。
「アウトォッ!!」

「セーフッ!!」
「よよいのッ――――――――」
――――――ピシャッと、僕はドアを閉めた。
・・・・・・・え、何今の？
なんかパンイチのむさ苦しい野郎共がテンションＭＡＸに猛り狂ってたんだけど!?
「疲れてるのかな・・・・・・」
そうだ、そうに違いない。
昨日、夜遅くまで祐一と進級祝いという名の飲み会という名のゲーム大会やってたから目が疲れてるんだ。
そうだよ、学校にパンイチの男なんている訳無い・・・いや、１人いたか。
「まぁ、けど祐一以外いる筈ないよね」
なんかパンイチどころか全裸の野郎がいたような気もするけど、それも含めてきっと気のせいだ。
そう思って、僕はもう一度勢いよくドアを開けた。
「上田ァッ！　テメェの負けだぜぇぇぇーッ!!」
「お前は裸エプロンの刑だぜェィ！　ヒャッハァァァァァーッ!!」
「クソッタレエエエエエエエエーッ!!!」

現実だったよクソがッ‼

「違う！　僕が信じた仲間達と、この光景は１８０度真逆なんだ‼」

「おー、明久じゃねぇか。遅かったな」

言って裸エプロンで僕に近づいてくる、縮れ毛みたいな黒い天パに死んだ魚の様な目をした、覇気のない締まりのない顔をしたダメ人間。

「ゴミ野郎！」

「朝っぱらから俺に喧嘩売るたぁいい度胸だ」

「あ、ちょ、止めて!?　その拳は僕に効くッ‼」

思わず土下座で拳を引くように頼み込んでしまったけど、そうじゃない！

「祐一！　何で平然と裸エプロンなんてしてるのさ!?　絶対おかしいでしょ!?」

下手しなくても虐めじゃないか！

「ああ、明久もそう思うか？」

祐一も、自分の身を唯一隠すエプロンに手をやりそう言う。

やっぱり、祐一もおかしいとは感じているみたいだ。

「今さっき雄二にも言われたわ――――『お前に裸エプロンは死ぬほど似合わねぇ。キメェ』って」

「僕が『おかしい』って言ったのはそういうことじゃない‼」

「あぁ？　服装の話じゃねぇのか？」
「いや服装の話だけど！　似合う似合わないの話じゃないでしょ!?」
「・・・・・・何が問題なんだ？」
「問題しかないよッ‼」
なんで祐一はいつもいつも微妙に話が通じないんだ！
全くこれだから馬鹿は困る‼
「どうも話が通じねぇな。全くこれだから馬鹿は困る」
「僕の台詞なんだけど!?」
「おい、雄二からも何か言ってやれ」
え？　雄二もこのクラスにいるの？
まぁ、アイツもバカだからこの学校の最底辺クラスにいても不思議じゃないけど。
祐一の視線の方向へ目を向ける。
雄二が畳の上で全裸で倒れてた。
「雄二イイィィィーッ!?」
何で雄二が全裸なの!?
しかも何か白目剥いて口から泡吹いてるんだけど!?
「何だ、まだ気絶してやがんのか。俺の裸エプロンを笑うから、俺にボコられて身包み剥

がされるんだよ」
「祐一のせいじゃないか!?」
　自分でシメといてなんて太々しい‼
「おいムッツリーニ、雄二を叩き起こせ」
　あ、ムッツリーニもいるんだ。
　言って祐一は、足元にうつ伏せで転がっている男子生徒を、つま先で転がして仰向けにした。
　鼻血を垂らし、血色を失った土屋康太（ムッツリーニ）だった。
「ムッツリイイイイイイーニッ!?」
　どういう事!?
　何でムッツリーニまで瀕死の状態で倒れてるの!?
「・・・・・・・あ、明久・・・・・・・」
「しっかりしてムッツリーニ！　傷は浅いよ‼」
　ムッツリーニはフルフルと手を痙攣させながら、指さす。
「・・・・・・お、オレの代わりに。カメラの、シャッター・・・を・・・・・・・（ガクッ）」
「ムッツリイイイイイイーニッ‼」
　クソッ！　一体誰がこんなひどいことを!?

ムッツリーニが差した先に、そいつはいる筈だ！

一体誰が――――――

「むぅ、何故わしがバニーガールの衣装なんぞ着ねばならんのじゃ」

――――――バニーガールの秀吉が、そこにいた。

「（ブシャアアアアアアアアーッ‼）」

「明久よ、何故お主は登校早々鼻血を噴き出して倒れておるのじゃ!?」

いや、それは秀吉のせいだよ・・・・・・。

こ、こんな教室で僕は1年を過ごすのか。

・・・・・・生きていけるか、自身が無い。

・